

風 韻

五十周年記念号

第23号

(昭和五十八年度)

神戸大学風韻会

風 韻 第 2 3 号 目 次

◎ 六十年の思い出 (その五).....	師 匠	宇治 正夫.....	3
◎ 風韻会の新展開	会 長	荒川 祐吉.....	4
◎ 先輩登場			
○ 思い出の番組.....	旧 1	藤井 茂.....	6
○ 「安宅」から「正尊」まで	旧 5	米花 稔.....	9
○ 風韻会五十周年雑感	新 6	堤 文男.....	10
○ 「役」	新 13	戸次威左武.....	11
◎ 第四回風韻OB会報告.....			12
◎ 学生投稿			
○ 風韻会に入って.....	P 34	田岡 昌美.....	13
○ 今、考えていること.....	B 34	梅園 健治.....	13
○ クラブと学連.....	A 16	船寺佳奈子.....	14
○ 「五十周年記念秋季大会」を終えて.....	P 32	松元伊知郎.....	15
○ ミニミニ五十年史 一亥年編一		ピーチパイ.....	16
◎ あしあと (昭和57年度).....			18
◎ 五十周年記念秋季大会番組			20
◎ 卒業生より			22
◎ 決算報告			23
◎ 伝言板			23
◎ 新役員紹介			24
◎ 幹事長就任にあたって.....	J 33	木下 宏志.....	24
◎ 昭和58年度行事予定.....			25
◎ 名簿変更通知			26
◎ OB通信			27
◎ 風韻会名簿			28
◎ 編集後記			29



卒都婆小町 … 宇治正夫

昭和43年

於 大槻能楽堂



O B 会



50周年記念秋季大会

六十年の思い出（その五）

師匠 宇治正夫

神戸大学風韻会が五十周年を迎えた。去年十一月二十一日に上田観正会能楽堂で記念大会が催されたが、学生会員諸氏や先輩の皆さんにとって意義深い会であり、わたくしにとっては五十年の歴史を飾る思い出深い会であった。神戸大学長から感謝状を頂き光栄に感
激したことがある。

こうした栄誉を受けるにつけても、この後ともこの道に精進したいものと思うが、さしずめ、学生諸氏、特にこれから謡曲を始めようとする方に次のような練習方法を提案したい。

- 一、最初の一年は、毎日自分一人で十分ずつ練習することによって節の上げ下げを覚え
る。
 - 二、二年目には毎日の練習十五分で、大体の緩急を会得する。
 - 三、三年目には曲の位と気合の入れ方に没頭する。
 - 四、四年目には以上を総合して完成に努める。
- 学生諸氏は集団で練習する機会が多いので、お互いにはげまし合って練習にいそしまれるならば、四年の間に驚くほど上達せられるものと思う。諸氏の攪まざる精進を祈るものである。

風韻会の新展開

会長 荒川 祐吉

昨年十一月二十三日は、忘れられない日でした。この日、わが風韻会は創立五十周年記念謡会を持ち、又多数先輩御参加のもと、盛大な記念懇親会を持つことができました。

その席上、われわれを、実に五十年半世紀の長きにわたり、利害得失を超越した、限らない愛情と、熱意を持って御指導賜わり、単に技術の煉磨のみでなく、日常の起挙動作、そして考え方にいたるまで、深い影響を及ぼし、風韻会存続の主柱となつてこられました師匠宇治正夫先生に対し、神戸大学長名によって特別の感謝状が授与されましたことは一段と深い感銘を与えました。

さらに本年三月十九日、卒業生歓送謡会に際しては、大学々生部から、永年の課外活動御指導への感謝の意を込めて、記念品が贈られました。

こうして、わが神戸大学風韻会は、次の半世紀へと一步を踏み出したわけです。宇治先生御自身の主宰される宇治風韻会も、稀有な、創立六十五周年を昨年迎え、三回にわたる盛大な記念謡会が持たれました。

しかし、三月十九日の歓送謡会後の懇親会席上、わが神大風韻会

としては、全く深刻な、然し早晩避けることのできないであろう問題を、宇治先生御自身から提示されるというショックな事態を迎えたのです。それは、神大風韻会の師匠を三月末限りで退きたいという御意向の表示でした。

実は、このことについては、かねてから、私や藤井前会長、米花OB会長、その他若干の先輩は、その御意向を伺がっていたのですが、神戸大学風韻会は、宇治先生と一心同体であり、また先生にとつても特別の意味を持った存在であり、わが風韻会を除いた宇治先生は考えられないといった状態であることは誰の目にも明かであるので、御健康上、早晩このような事態は避けられないにしても、後任師匠は、宇治先生の精神を戴し、いわば風韻会の二代目師匠ともいう形で引受けていただける方を、宇治先生御自身の御配慮で御推挙願いたいとお願ひしていたところでした。

然し、現在中々適当な方を探し又お願ひするということは難かしく、早急に後任を得ることが困難な事態になっています。いろいろ経緯はございますが、詳細については、この件が落着してから、又適当な形で御報告させていただきます。それまでは、宇治先生からの御意向表明にも拘わらず、特に先生にお願ひして、従来通り、学生の御指導をお願ひすることとし、先生も心よく御承知下さっております。従つて現在は、従来と同じ状態がなお続いているわけで、その点は、当面安定しているわけですが、後任問題と関連して、新しい半世紀における、わが神大風韻会の新しいあり方の探究は緊急の避けて通れない大課題となっていることを御承知おき願ひたいと

思います。

この課題について、現在、宇治先生に更に後任に就て御検討御推挙をお願いしておりますが、前会長、OB会長、先輩諸氏、それにも何よりも現役学生諸氏の御意向をも十分享けて最善の解決に持って行ければと念願している次第です。

五十周年を経て、現在わが神戸大学風韻会は、会員の気力、技術に於て、最も充実した状態にあると思われます。このことは、いうまでもなく、宇治先生の全身全霊を傾けた親身の御指導の賜物です。私共は、先生の御健康の許す限り、先生の御指導を受け続けたいという気持を拭い去ることはできません。しかし、いつまでも一方的に当方の希望のみを押し出すべきことでもありません。すべては、何よりも宇治先生の御意向が優先すべきだと考えます。そして、その御意向を受けて、折角ここまで育てていただいた、わが神戸大学風韻会が、次の飛躍に向って誤りなく、的確な第一歩を踏み出すことができると切望するばかりです。

そのために、例えば謡に関しては、先輩方に、頻繁に稽古場を訪ねていただき、春秋二回の会の時に限らず、随時、現役生の指導をしていただけるような形も考えられてよいのではないかとも思われます。

ともあれ、今、われわれは、発足以来、最大の難関に遭遇しています。先輩諸氏、現役学生諸君の積極的な取組みと御支援を特にお願い申し上げます。

尚末筆ですが、風韻会五十周年に当り、宇治先生への記念品料と

して、多数の先輩から多額の御芳志を頂戴いたしました。茲に厚く御礼申し上げます。

(一九八三・四)

※ 私事ですが私住所を左記に移籍しました。移籍前後の混雑のため寄稿が大変遅れ、編集者は勿論皆々様に多大の御迷惑をおかけしたと、深く深くお詫び申し上げます。

新住所

〒664

伊丹市平松六丁目二番十一号

電話は従来通り。

先輩登場

思い出の番組

旧一回生 藤井 茂

一 この間、古い番組を整理していたら、なつかしい思い出の番組の数々が見付かり、当時の回想に耽った。その二つ三つを取り出してみよう。

二

神戸大学風韻会五十年の歴史の冒頭を飾る番組がある。「神戸商大謡曲大会番組」昭和七年十二月十五日（木曜）午後五時始、十時終了、於上筒井終点上ル神戸商大構堂というのがそれである。宇治先生が商業大学で教えられるようになったのは昭和七年四月であるから、宇治先生御指導下の最初の大会であったと思われる。

素謡三曲、番囃子一曲、連吟一曲、独吟五曲、仕舞九番、舞囃子一番の豪華番組で、番囃子と舞囃子の地頭に宇治先生のお名前が書いてある。学生の中にはわたくしの一期先輩の国重猛君（数年前物故）大本（高崎）貞男君、生田八郎君を初めなつかしい名前が連っている。

当時わたくしは母校の助手になったばかりで、学生のけいこのす

んだ後で宇治先生の個人指導を受けていた。先輩助手の白杉三郎氏と八木弘氏が加われ、それ以後多数の教官が宇治先生のお弟子になられたのであるが、この大会の頃にはまだ助手陣だけで、三人で小袖會我を謡った。番組ではわたくしが母となっているが、確か五郎を謡ったと記憶している。白杉氏が十郎、八木氏が母（番組では五郎）であった。

当時大学は上筒井にあり、市電と阪急の終点が上筒井にあって交通の要衝に当り、学生街の風物に富んでいた。商大の行事は神戸市民の関心の的で、夜間の謡会にも一般市民の来聴が多かった。ある新聞にこの大会の記事が載り、教官が学生に混じって謡ったことを特筆した上で、おとなしい十郎に勇ましい五郎と評していた。

その時の兄貴分の白杉三郎教授（保険論）は温厚で碩学のほまれが高かったが五十歳にして惜しくも世を去られた。今一人の兄貴分の八木弘教授（会社法）は神戸大学長を勤めた後、南山大学教授に転じ、後を追ってわたくしも南山大学に移り、交友四十九年に亘ったが、一昨年他界されて今は故人である。

この一枚の古い番組が神大風韻会の五十年の歴史と、その創立当初に活躍した人々の面影を映して思い出はつきない。

三

安宅・勸進帳については前に思い出を書いた（「勸進帳礼讃」風韻十五号）。勸進帳に劣らず思い出の深いものに正尊・起請文がある。

その第一は、風韻会の二十五周年記念大会（昭和十八年四月十一日、於神戸能楽会館）で、大槻十三先生のシテに対してワキを勤め

させて頂いたことである。宇治先生の師であるというだけでも心が縮む思いであの豪壮な謡に圧倒されながら必死に謡った（無本で）

時は太平洋戦争のさ中、こうした会に出られるのもこれが最後かも知れぬという感慨が深かった。神戸能楽会館はその後戦災で焼失し、大槻十三先生も今は故人である。

その第二は、戦後、昭和二十四年八月二十一日、三田市の心月院で開かれた風韻会の大会で、宇治先生のシテに対してワキを勤めさせて頂いたことである。この時も宇治先生の力のこもった謡に圧倒されながら、緊張感に震えて謡った。

当時宇治先生は三田の隣の三輪に住んでおられ、終戦後は三田の各所で会を催された。汽車の切符の入手が困難な頃で、三田駅の助役さんが社中におられ、便宜をはかって下さって助かったことも思いつきの一齣である。

その第三は、風韻会四十五周年記念大会（昭和三十七年三月十八日 於大槻能楽堂）で柚木馨教授（民法）のシテに対してワキを勤めたことである。その時のことを誌した一文がある。「大曲の抜きをされたわけで、お隣に坐っていて先生の呼吸や脈搏が感ぜられるほど力のこもった一曲であった」（「故柚木馨先生と謡曲」風韻六号）。柚木先生は夫人共々熱心な社中で、この直後神戸大学長になられ、神大風韻会の発展のためにも尽して下さったが、学長在職中に病のため逝去された。

この柚木先生の追善謡会が風韻楽堂で催された（昭和四十年十二月二十六日）。この会では浜田千鶴子さんが正尊のシテをわたくしがワキを謡った。浜田さんは熱心な社中で、わたくしも三田以来親

しくして頂いたが、惜しくも病に冒され謡に心を遣って他界された。わたくしが正尊のシテを勤めさせて頂いたのは風韻会の六十周年記念大会（昭和五十二年十一月十三日、於湊川能楽殿）においてであった。無本で一心不乱に謡ったつもりであるが、出来ばえのほどは定かでない。

わたくしはこれより十年前の風韻会五十周年記念大会（昭和四十二年十一月二十六日、於大槻能楽堂）で道成寺を披かせて頂いており、晴れの舞台を終えた安堵感と、学園紛争、海外出張、神大から南山大学へ転任など身辺の多事に紛れて謡から遠ざかりがちであった。六十周年記念大会に正尊という大曲を振当てて下さったのは、もう一度真剣に謡に打ち込ませようという宇治先生の深い思いやりがあつてのことと思っている。それかあらぬか、先生のおけいこの厳しかったこと。正尊のむつかしさと謡の奥深さを思い知ったことである。夜分にお伺いしてきびしいこをつけて頂いた後で、當時まだお元気であった奥様の汲んで下さったお茶の味と、慈愛にみちた眼ざしとお声は今もなお鮮やかに思い出される。

四

春風秋雨五十年、神戸大学風韻会がこの長い期間にわたって発展し続けたことについては、宇治先生の終始変らぬ熱心な御指導があったお蔭であり、同時に歴代の学生会員の携まざる精神があったればこそで、げにローマは一日にして成ったのではないと感嘆と感謝の念にみたされる。

それにしても、思い出の中での如何に多くの人が故人となられたことか。去る十一月二十一日の神戸大学風韻会五十周年記念大会では、

これらの方々への追悼の意をこめて感慨深く謡わせて頂いたことである。

(昭和五十八年
一月八日)



鶴 素 組
詞 田 正 次
連 吟 井 上 雅 夫
紅 仕 舞 本 間 孝 之 助
鶴 田 電 吉 野 純 治
羽 野 村 大 野 一 若
熊 野 大 野 一 若
運 々 本 間 孝 之 助

小 獨 吟 井 村 好 雄 大 野 一 若
管 野 井 村 好 雄 大 野 一 若
籬 大 野 一 若
弱 法 師 高 崎 貞 男
松 風 生 田 八 郎
佳 川 國 重
角 井 茂

小 袖 會 我 五 八 木 三 郎 弘
仕 舞 白 杉 三 郎 弘

忠 度 關 米 太郎 梅 井 未 治
舞 囃 子 (全附送) 川 越 英 治
高 綱 清 敬 盛 舞 萩 野 良 郎
之 段 繩 松 永 清 次
砂 井 村 好 雄
舞 囃 子 生 田 八 郎

舟 辨 慶 長 野 國 忠 一 次 川 越 英 治 梅 井 榮 太 治
子 方 萩 野 良 郎 梅 井 未 治
番 囃 子 長 野 國 忠 一 次 川 越 英 治 梅 井 榮 太 治

祝 言

主催 神戸商業大學観世流謡曲會

實 質 本 位

本 位 零

百 万 兩

支 店 和 食 酒 場
上 口 井 上 氏

本 店 高 級 酒 場
新 開 地 正 通 町

謡 曲 書 紙 類

小 松 書 店

中 小 學 校 東 園
電 話 混 合 一 〇 四 一 番

音 樂 の 喫 茶 室
結 成 日 昭 和 七 年 二 月 十 五 日
所 在 地 神 戶 市 東 區 南 港 一 番 一 号

ビ ー 音 樂 店 喫 茶 部
西 區 西 學 校 前

昭 和 七 年 十 二 月 十 五 日 (木 曜 日) 午 後 五 時 始 十 時 終 了

神 戸 商 大 謡 曲 大 會 番 組

來 聽 歡 迎

上 口 井 上 氏 於 神 戸 商 大 講 堂

神 戸 商 大 謡 曲 大 會 番 組 昭 和 七 年 1 2 月 1 5 日 (木)
於 神 戸 商 大 講 堂

(藤 井 先 生 の 御 厚 意 に よ り)
掲 載 さ せ て 頂 き ま した。

「安宅」から「正尊」まで

旧五回生 米花 稔

「千手」のシテ荒川祐吉会長、ワキ藤井茂名誉会長、そしてツレ小生で勤めさせてもらったのは、昭和五十七年十一月二十一日上田能楽堂での神戸大学風韻会五十周年記念の催しにおいてであった。

小生が宇治正夫先生に手ほどきをうけるようになったのは、昭和八八年春神戸商業大学入学早々であるから、私にとっては四十九周年ということになる。その自らの五十周年ともいう年、昭和五十八年一月十六日湊川能楽殿で、風韻会六十五周年記念会で「正尊」のシテを謡わせていただいた。はからずも家元観世元正師を地頭、藤井久雄、吉井順一郎らを地に迎えることとなり、ワキ船橋靖雄氏ら社中先輩の参加を得ることとなった。感激の新しい年を迎えることができ感謝で一杯である。

大学に入ってその風韻会に属しただけでなく、直接に熊内の宇治先生のお宅に通い出したのは、父の影響といえよう。当時姫路の乾物問屋の当主の父は、西宮の先年なくなられた村上義一師について久しく、翌昭和九年春には姫路市公会堂で同師の一陽会の催しの満員の聴衆を前に「安宅」のひらきをしたので、当時最も油ののっている時であった。健在なそして勤厳な祖父がこれを必ずしも心よく思っていないなかで、今の小生とくらべものにならない熱心さで、修練をかさねる気づかいは相当のようであった。その父はそれから

一年たたない昭和十年一月、小生の大学二年の冬、満四十五歳で没した。翌十一年春一陽会の追善謡会で、宇治先生の了解を得て、その限り村上師につき、おなじ姫路市公会堂で「天鼓」のシテを勤めさせてもらったことは、そのためのかなりののけいこもふくめて、今にあざやかな想い出である。

当時の大学風韻会三年間の想い出は、春秋の大会、社中の風韻会参加、関西の六大学の大会など今と変わらないであろうが、仕舞一番会は印象的である。ただ今日の学生諸君のクラブ活動的な先輩後輩間の熱心な交流、合宿などはそれほどなかった。同期の西尾雄一君は今も現役のようで、時に大学風韻会に参加してもらっているのは承知の通りである。

私も多くの卒業生と同様、社会に出ると共に何時しかけいこに通えなくなり縁が薄くなった。第二次大戦も終り近い昭和十九年はじめ大学に帰り、再び多少とも謡いだしたのは戦後昭和二十三、四年ごろからであったろうか。藤井茂先生宅とか西宮北口の小生宅近くの集会所などに応じて宇治先生に御足労をわずらわした。しかし仕事の多忙さからそれも杜絶え勝ちであった。その後の四半世紀はいわば予備役の感がある。その間私の内に謡曲のともしびをたやさずつつけさせてもらったのは、もっぱら藤井茂先生の心くばりのお蔭である。大学風韻会の春秋の大会にさそわれ、教官有志でいくつかの曲目で参加し、時には社中の会にも顔をだした。俄かげいこのつたなさに、いやな顔もせずその都度指導いただいた宇治先生に感謝のほかなく、今思えば厚かましい謡いぶりであった。藤井先生による「間関点呼」と称して感謝した。若い人に通じにくい用語で

はあるが。

定年をひかえた年の暮、翌春の風韻会六十周年記念で「安宅」を謡わないかという宇治先生のおすめが、今から思うと現役にもどるきっかけであった。はじめにのべたように父の「安宅」の想出がこのきっかけになったともいえる。新年早々一月五日から宝塚の先生のお宅に通い出した。今日の毎週早朝けいこの慣習がこの時にはじまる。定年の春昭和五十二年四月二十四日風韻会六十周年記念の大槻能楽堂で、つたないながら「安宅」を勤めさせていただいた。

それからの毎週のけいこ、春秋の大会を通じて、「しかられることのさわやかさ」と「ひとりよがりになり勝ちのいましめ」によって、現役のありがたさをしみじみと味う。これは熟年期もよいところに来た研究者としての日常のあり方ともっともかわることからである。宇治先生に感謝のほかない今日このごろである。

さてこのたびの「正尊」についてである。会近くなってかなり熱心に練習した。間近まで先生の行届いたきびしい指導、しかも最後には「細かいことに気にせずに思う存分に」と緩急にわたる心づかいをいただいた。さて本番に臨む。「武蔵殿かやあら珍らしや……」から慎重に進んでこれはいけると思ったもつかの間、家元を地頭とする地の、いつもとちがう本職の迫力はどうしようもない。それに乗って進むうち、起請文半ばにははや思いがけず声量不足を露呈しそうになる。かくて後シテの名のりは、平素以上に苦しくなる。こんなはずではなかったといいきかせ、辛うじてボロを出さずにやつのところで名のおえる始末。予期した「正尊」にはとどかぬまま、せい一杯つとめたことに満足しないわけにいかない結果となっ

た。生涯にめつたにない貴い経験であった。

余談ではあるが、「観進帳」の「安宅」の作者が観世信光といわれ、その長男観世俊俊が「起請文」の「正尊」を作ったといわれる。作者不詳の「木會」の願書と共に三詠物といわれている由であるが、「安宅」と「正尊」とはいろいろ対比できて興味深い。今の私にとって、とりわけ印象深い二曲であることは、読みとっていただけたと思う。

(昭和五十八年二月六日)

風韻会五十周年雑感

新六回生 堤 文 男

風韻会が五十周年を迎えたという。誠に慶賀にたえない。神戸大学の歴史が高商から数えて八十年だからその半分以上の期間にわたって活動してきたわけである。これはひとえに宇治先生の芸術に対する情熱を基盤にした誠実なご指導と、藤井先生、荒川先生、米花先生をはじめ多くの先生方や諸先輩が現役時代から今日に至るまで、会の運営についていろいろご尽力された賜と思う。

ふり返ってみると、私の入会していた昭和三十一、二年は丁度その中間の時期に当ることになる。当時は戦後の混乱期をようやく脱したとはいうものの、大学の下にはまだ駐留軍のハイツがあり、六甲台は三学部だけであったから風韻会のメンバーもその範囲に限られていた。しかも六甲台へ来るのは専門課程に入ってからであり、現役として活動できたのは僅か二年余であった。そのためかどうか

はわからないが、当時の練習は殆ど謡いのみで、数名が個人的に仕舞を習っているという状態であった。メンバーは当然男子のみといつてよく、質実剛健という気風であった。その中で唯一人、教育学部在学中であった、姫路分校の都留師範のお嬢さんが時々顔を出され、殺風景な集会所に和やかなムードをもち込んでくれた。最近には女性会員が多くなり、発表会でも舞囃子などもとり入れられて華かになっており、今昔の感がある。

宇治先生には月に三回お越し頂いていたと記憶しているが、謡いの練習は毎日、昼食後は必ず正門横の集会所に集まり、先輩の指導で大声を出していた。私の入会当初は五回生の上野先輩から実に懇切なご指導をして頂いた。今から思うとこの毎日の練習というのが非常に有意義で、習った期間の短かさにも拘らず、学連コンクールに入賞（三十一年三位、三十二年二位）するまでの力をつけることができたのではないかと思う。

風韻会に入つてよかったことは、いささかでも古曲芸術に親しみ能・謡にあらわされた、もののおわれ、美しさ、楽しさなどを味わうことができるようになったこと、また腹の底から声を出して謡うことの爽快さを知ったことと共に、所謂「同じ釜の飯を食った仲間」として年齢や性別を越えた付き合いをして頂ける人達が大量得られたことだと思ふ。

卒業してからは忙しさを理由に稽古は中断したままだが、謡いや風韻会に関心がなくなつたわけではない。米花先生がよく「予備役」という言葉を使つておられたが、今私もまさに予備役（休眠会員だと思つている。このことは私だけでなく、多くの卒業生が同じ気持

ではないだろうか。しかし現実には永い間稽古をしていない者にとつては、発表会のご案内を頂いても足を運び難いことも事実である。そういった卒業生の気持をくんで、荒川先生のご発案で、謡い抜きのOB会が毎年夏開かれるようになった。昨年で三回を数えたが、毎回二十名前後の参加があり、いろいろな話題に話の花が咲いている。私は予備役の一人として参加させてもらつており、同じような気持の人が一人でも多く参加されることを願っている。そういう人達の輪が大きくなることによつて、風韻会が今後さらに六十年、七十年、百年と発展するための一助となることができると信じている。

「役」

新十三回生 戸次 威左武

神戸大学風韻会五十周年おめでとうございます。僕もこの会に入っていたので早くも二十年余になり、この会にちよくちよく出させて頂いていることを大へん楽しみにしています。

大学時代教えていただいた藤井先生、米花先生、荒川先生にお目にかかれてお話が聞けるのも楽しいですし、僕もついこの間であつたと思う学生の元気な姿に接することも楽しみのひとつです。

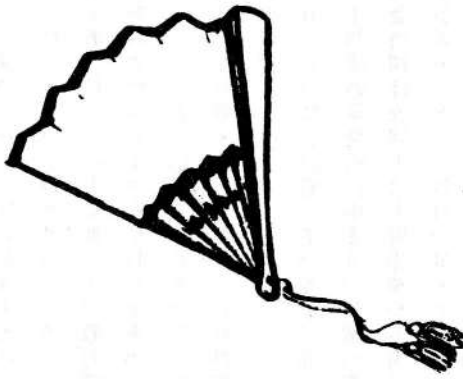
中でも楽しいのは、実力の伯仲した先輩にまじつて思う存分謡が謡えることです。自分でこの謡はこのように謡うのだと信じて、その通り謡えた時は、何とも言えない満足感が得られます。そんな時は謡つた後も、何度も何度も口ずさんでみてまた楽しんでいきます。

謡には役がありますが、良く考えられていると思います。ワキはシテの位を取ってはいけませんし、ツレはツレらしく謡わなければなりません。僕も地元に住んでいるものですから、いろんな会合に出席します。僕が主催する会合ですと、主役でいれば良いのですが、そうでなければ、ワキ役かツレで良い時もあります。そんな時はでしゃばってもいけませんし、控目すぎてもいけません。今日の会合は何役でいくか考えて行くことにしています。

家庭におきましても、謡の役に相通じるところがあると思います。僕の家为例をとりますと、少し役の重いツレの母親、シテの女房（以前は僕がシテでしたが）ワキの小生、ツレ、ワキツレ、子方の子供三人、これだけで毎日、りっぱな能を演じております。

謡の方も以前はツレの面の純粹な美しさに引かれてツレが好きでしたが、この頃は人生の年輪を感じるワキ役に興味を持っています。

しかし、僕の人生が一つの能であるとしたら、僕自身はその主役でいなければなりません。ワキ役とかツレとかなまっちゃよろいことは言っていられないような気がします。



第四回風韻OB会報告

とき 昭和五十七年八月二十二日（日）

ところ 三宮交通センタービル六階 スカイサントリー

会費 八千円

参加者 藤井茂、荒川祐吉、米花稔各先生、伊藤欣二、杉本孝昭、

里井三千雄、東谷晟、牧千雄、林哲夫、堤文男、佐々木

肇宏、戸次威左武、段野治雄、松村有芳、伏見正章、

佐野邦子各先輩

OB会も回を重ねて、すっかり定着したように思われます。今回も多数の先輩方の御参加をえて、盛大に行なわれました。神大風韻会五十周年のことなど、話は尽きず、また昔なつかしい歌までとびだすほどの、にぎやかな会となりました。

報告		
収入	部費	130,000
	繰越	152,376
	利息	894
		<hr/>
		283,270
支出	部費	126,000
	会場	22,000
	通信	1,470
	写真	400
	雑費	133,400
	保留	<hr/>
		283,270

学生投稿

風韻会に入って

P 34 田岡昌美

あつというまに月日がたつて、気がついてみるともう十二月の半ば、大学生になってから八ヶ月が過ぎていました。この半年以上の日々を思い出してみるとその半分以上が部のみんなとすごした時間でした。まだまだ未知のことがいっぱいありますが、つらかったことやうれしかったことや思い出もたくさんできました。

風韻会に入った理由は、部の説明のときにコーヒーとお菓子をお願いしたことわりきれなくなったことですが、これはおもてむきの理由で、本当は部の先輩達がとてもあったかい人たちだったからです。大学に入った頃は知っている人が一人もいなくて本当にころぼそくてたまりませんでした。部の説明会の日も一人でテニス部に入ろうかとか思つてウロウロしていました。そんな時に一人の先輩につれられて風韻会の説明をききました。それからジュニア部室にいつてトランプをしました。その時の先輩たちの雰囲気がとてもあったかくて、「みんないい人だなあ」と思いました。

でも練習はなかなかきびしいです。私は何かと理由を見つけてもうとばかりしてましたが、この頃は何とはなしに火、木、土になると足が向くようになりました。(?)

一番思い出に残っているのはやっぱり夏合宿だと思います。二回の三時間におよぶ騒いの練習はすぐ足がいたくて、二日目になると騒いの時間が近づいてくると恐ろしくなってきました。先輩が「長いと思つても気づいてみると帰る日になってるよ」と言われても信じられなくて耐えられるかなと心配でたまりませんでした。でも今思い出してみると本当にあつというまの八日間でした。つらかったけど楽しい思い出もたくさんできました。それにちょっとだけですが強くなれたように思います。

私はかなり人と話するのが苦手で、時々おちこんでしまうこともあります。でもそんな時、部に行つてみんなの中に入るとだいぶ元気になりました。これから四年間、がんばつて多くの先輩や友人や後輩と仲よくなれたらいいな。いつまでもこのあったかい人たちの集まる風韻会であつて下さい。

今、考えていること

B 34 梅園健治

まあ、今日は、風韻の原稿のべ切りの日のようですので、朝からジュニア部室に来て、過去の風韻などをひっぱり出してきて、いろいろ考えこんであせているわけですが、むかいでは、同じ一年の馬島君が独語の予習をやっています。八ヶ月前のころのことを思い出せますと、そのころ風韻会に入部したわけですが、今思えば、本当に能について、何も知らなかったことにあきれます。今も何も

知りませんが、当時は、一大学生として、あるいは一日本人としての能に対する知識すら持ちあわせておりませんでした。だから、初めて六甲台の部室に行った時は、「能とは、こういうものだったのか」とうちのめされる思いでした。だから入部当初は、練習に行くのが大きな苦痛でした。そのころクラブの楽しさといえば、ほとんどジュニア部室へ行くことに占められていました。当時は、年がら年中、正月みたいなこのジュニア部室の状態にあきれましたが、それは、十二月の今でも少しもかわっていません。この部室でいくつかの新しい遊びを覚え、いくつかの夜をすごしたものでした。だから私の頭の中では、部室と言われれば、六甲台の部屋よりジュニア部室を思い浮かべてしまいます。

というわけで、書くことにこまって、先輩に「五十周年ということを考えて文章を書け」といわれたのに、全然関係のないことを書いてしまいました。皆様申しわけございません。しかしジュニア部室の壁に書かれた先輩方の名前を見ると、つい五十周年の歴史というものを感じてしまいました。(五十年前からジュニア部室があったとは思えませんが。)しかし、五十周年ということは、すばらしいことだと思います。私は今年の十月、青春の十代に別れをつけたのですが(つまり、二十才になったということです)最後の十代を伝統ある風韻会ですごせたことを、たいへん幸せに思っております。なお、五十周年とは、別に関係ありませんが、ジュニア部室にこたつが寄贈されました。先輩もあたりにいらしてはどうでしょうか。でもこの風韻のころは、そんな季節ではないでしょうね。馬島君も予習を終えたようですので、私もこのへんで失礼させていただきます。

たきます。

クラブと学連

A 16 船寺 佳奈子

クラブに入ってはや一年と八ヶ月。アツと言う間に過ぎてしまいました。この間にいろいろな人との出会いがありました。まず私を勧誘して下さった先輩。この先輩がもし勧誘してくださらなかったら今の自分は存在しなかったかもしれません。そしてこのクラブに入って二十数名のクラブ員と知り合い、そしてOBの方々、そして他大学の能楽部の人達。私は学連の委員をした関係上、この人達と多く知り合うことが出来ました。他大学の人と話していると、それぞれそのクラブの性格を雰囲気的にもだしていて面白いものです。かく言う私も知らず知らずのうちにクラブの性格に染まってくるかもしれません。

さて、その学連のことに少し触れてみると、前述のように、それぞれ十大学の個性が見られます。能楽中心に運営しているクラブ。能楽を媒体としての人間関係を重視しているクラブ。我がクラブは後者に属すると思いますが、このようにそれぞれの個性を持ち合わせて一つのことをしようとする衝突が生じます。例えば、舞台は別として何かの遊びを計画しようとした場合、後者のクラブは、諸手をあげて賛成しますが、前者のクラブは、そんな遊びなどすれば練習に差し支えるとして反対します。この両者の話し合いの結果、

大抵の場合、後者が勝ち、その遊びは実行されます。後者の方が勢力が強いのです。ということはつまり、能楽を媒体とする人間関係を重視していくクラブが多いのです。我がクラブもこの部類に属すると思います。というのは能楽に興味を持って入ってきた部員がごくわずかしかないからです。大抵の部員は勧誘されて入ってきています。この私もそうです。この傾向は他大学でも強いとみえ、勧誘の穏やかなクラブは部員減少が深刻な問題となつています。現に今年二大学がこのために休連という形をとらざるを得なくなつていきます。幸い我がクラブは今そういう問題を抱えていないもの、いつ降り懸かるかわかりません。能楽とは本当に奥の深いものだと思います。いくら練習してもしすぎることはありません。恐らく人生七十年練習し続けたとしても完成したものはできないでしょう。それをわずか四年間の大学生活で何ができるでしょうか。部員減少もこの疑問を感じるゆえに起こるのだと思いますが、私は結果が問題ではないと思います。一生懸命やつてきたという過程が問題だと思うのです。よく卒業されていく先輩方は「四年間クラブを続けてきて良かった」と言われます。私も卒業する時にはそう胸を張つて言いたいのです。来年はいよいよ私達が幹事をとつていくのですが、能楽を中心としていくことはもちろん、人間関係も大切にしていきたいと思ひます。人間関係を通じて、お互いの人格を高め、和気あいあいと、能楽を求めていくのが理想的なクラブだと私は思ひます。この私達の学年がこの理想にどこまで近づけるかどうかわかりませんが、一生懸命やつていきたいと思ひます。

「五十周年記念秋季大会」を終えて

P 32 松元 伊知郎

五十周年記念の自演会が無事終了した。一つのクラブが五十年の間、存続すること自体、大変な驚異であるが、これも神大風韻会を支えて下さった宇治先生、並びに歴代の諸先輩方のご尽力の賜物と改めて頭の下がる思いがする。この記念すべき自演会に幹事学年として、また能舞台を借り切つて、しかも舞囃子をやらせていただいたのであるから、身の幸運に感謝の気持ちで一杯と言えば少々大げさであろうか。しかし、この自演会までの途中の過程を通して様々なことを得ることができたことは事実である。

「舞囃子」という未知のものに私が真剣に取り組み始めたのが、夏合宿が終わつた頃であった。それから自演会までの三ヶ月は、今ふり返つてみると本当に充実した期間であつた。この時ほど練習に打ち込んだことは入部以来なかつたことである。まるで自分が別人になつてしまつたような気さえした。

練習は「中ノ舞」を覚えることから始めた。型は夏合宿中にある程度先輩から習つていたので、とまどいはなかつた。クセとキリの舞も九月の末までにひと通り終えることができた。その後は「型を覚えてからが発だ」という某先輩の助言通りに、曲趣を考えながら、一つ一つの型や運足を研究した。とにかく舞い込むことだと思ひ、毎日のように部室に足を運び、納得のいくまで練習した。その

過程で何度かどうしようもないような壁にぶつかつたこともあった。特にシテ謡は宇治先生に何度注意されてもうまくできなかつた。

「腹の底から声を出すこと」謡は常にこの原点に戻つてこななければならぬ。しかし、いくら下腹から声を出そうと力んでみても、先生からは同じ注意しか返つてこなかつた。この時ほど謡のむずかしさ、自分の未熟さを痛切に感じたことはなかつた。

この三ヶ月は舞囃子の練習を通して、風韻会と接する自分の態度の絶好の転換期であつたとも言える。それまで何となく取り組んできた謡や舞の奥深さ、恐ろしさを感じさせられた。また、風韻会という組織のつながり、五十年という歴史が生み出した重みに触れることができたこともこれまでにない経験であつた。その歴史の一つの歯車に自分のような人間が組み込まれようとしていることに、とまどいを感じたが、それだけ責任も重いのだと思つた。これから先何年、このクラブが存続しようとも、風韻会の歴史が生み出したよき伝統は、保ち続けてもらいたい。

私がこの三ヶ月で得た最大の収穫は、一つの目標に向かつて常に努力を続けることの素晴らしさであつたように感じる。何か一つのことと真剣に打ち込むことほどの歓喜は、他にないのではなからうか。あの三ヶ月で自分の得たものは、これから先の自分にとって大きな宝となりそうに思う。



ミミミ五十年史―亥年編―

ピーチパイ

神戸大学風韻会が誕生して最初の亥年は、昭和十年です。この年第一回の芥川賞、直木賞が選ばれています。芥川賞には、石川達三の「蒼氓」、直木賞に、川口松太郎の「鶴八鶴次郎」が選ばれています。しかしこの二人の陰で一人の男が、悔し涙にくれていたことを忘れてはいけません。その男の名は太宰治といいます。彼は芥川賞が欲しいばかりに、審査員である作家に「私にちょうだい」という意味の長編小説ならぬ長編手紙を書いているのです。結局その努力も実を結ばなかつたわけですが……。まあしかし、昨今の何でも金品でカタをつけようとなさる大物の方々に比ぶれば、「カワイイッ！」と言えば失礼でしょうか。

それから十二年。昭和二十二年、日本国憲法が施行されました。この時、新憲法作成に尽力された方々も、その三十五年後に、写真入りの「日本国憲法」なる本がベストセラーになろうとは、予想だにしなかつたでしょう。この年は、近年も真っ青という程のインフレに悩まされておりまして、ビールなど半年の間に、八円から二十三元と約三倍の値上がりを見せています。また一方、十二年前に涙をのんだ太宰氏もこの頃は活躍めざましく、この年にも「斜陽」などの名作を生み出しております。

月日はめぐって昭和三十四年。皇太子様御成婚。美智子妃殿下を

モデルとしたミッチー人形がおもちゃ売り場をにぎわし、世はまさに「ミッチー・ブーム」。ここで突然ですが格言を一つ「歴史は繰り返す。」そう言えば数年前にも「ミッチー・ブーム」がありましたね。エッノミッチー違い。どうも失礼しました。またこの年は、「少年マガジン」「少年サンデー」「週刊文春」「週刊平凡」など稀にみる週刊誌創刊ブームでもありました。かく言う私なども、これらの雑誌と共に育った一人であります。

さらに十二年が過ぎて昭和四十六年。ようやく私もこの世に生をうけております。この年は、比較的明るいニュースと言えば、沖繩返還協定が調印されたことぐらいで、暗い事件ばかりが目につきます。成田空港をめぐる反対派と警官隊の衝突で、数人が死亡、千人の人が逮捕されたことや、さらには、新左翼が日本全国で暴卒を起こし、翌年二月の連合赤軍大量リンチ事件へと、破滅的暴走に向っていったのもこの年です。

そしてさらに十二年を経て、また亥年が巡ってきました。神戸大学風韻会は五十一年目に入ります。今年も年頭から、「コスモス」などという得体の知れないソ連のお化けが空から降ってきたり、日本が「不沈空母」にされたり、あまりいいすべり出しとは言えませんが、今後、起死回生のすばらしいニュースが飛び出してくることを祈っております。

これもちまして、私の下手な文章を終らせていただきます。風韻会の発展に御尽力下さった宇治先生をはじめ諸先輩方が、その輝かしい足跡をふり返られる時、この文章がちょっとした酒の肴にでもなれば、私としては喜ばしい限りであります。エッノ「こんな文

から思い出なんて湧いてこないよ」ですって。まことにごもつともなことです。失礼いたしました。

コンパの御用意は当店で

酒類・食料品商

みどりや

神戸市灘区六甲台町6番21
(六甲団地の下)
電話 (861) 0535番

御集会、コンパ、宿泊にどうぞ

六甲パーラー

六甲団地西
TEL. 861-6890



あしあと

昭和五十七年度 L32 藤井和之

三月

六日(土)～十二日(金) 春合宿

於香川県小豆郡内海町 民宿「きらく荘」

練習曲 一年「養老」「嵐山」「籠」「東北」「殺生石」「鞍馬天狗」「小鍛冶」。二年「高砂」「屋島」「井筒」「三井寺」「鉄輪」「放下僧」「安達原」

東、福岡、佐野先輩が参加して下さった。

十四日(日) 慰労ハイク 於甲山

二十日(土) 歓送誼会 於学生会館六階ホール

舞囃子「清経」(門之園)「船辨慶」(小谷)「融」(藤裏) 他、仕舞三番、素謡十番、連吟二番。宇治先生、藤井、荒川、井川先生、杉本、里井、久下、佐々木、段野、志智、伏見正、田中明、遠藤、伏見和、戸田、東、福岡、反田、古沢、佐野先輩が参加して下さった。

四月

上旬～下旬 新入生勧誘

男子七人、女子四人の頼もしい新人が入部した。

二十五日(日) 新歓ハイク 於布引の滝

五月

二日(日)～五日(水) 旧三商大交歓会 一橋大主催

発表会、東京見物等、皆疲れ気味であった。門之園先輩が全日参加して下さった。

十四日(金)～十六日(日) ジュニア合宿 於摩耶山王蔵院

練習曲「橋辨慶」「吉野天人」「大仏供養」「土蜘蛛」。古沢山下先輩が参加して下さった。

二十九日(土) 新歓コンパ 於六甲パーラー

頼もしい一年生が増えて活気に満ちていた。

六月

二十日(日) 関西学生能楽連盟春季大会 於山本能楽堂

仕舞「合浦」「経正」「杜若」「敦盛」「班女」他、連吟二番、合同物への参加など。

七月

四日(日) 神戸三大学合同発表会 於上田能楽堂 甲南大主催

素謡「橋辨慶」仕舞「清経」「善知鳥」「女郎花」他五番。

二、三年男女各々の合同素謡、狂言など充実した会であった。

十日(土) 謡納会 於部室

八月

五日(木) ~ 十二日(木) 夏合宿

於兵庫県養父郡関宮町 民宿「いしんぎょうや」

練習曲、一年「竹生島」「菊慈童」「経正」「田村」「羽衣」

「小袖曾我」「富士太鼓」「狸々」「紅葉狩」。二年「賀茂」

「敦盛」「清経」「熊野」「班女」「善知鳥」「船辯慶」「鶉

飼」。

岩崎、反田、門之園、能勢先輩が参加して下さいました。

二十二日(日) 第四回風韻OB会 於三宮スカイサントリ

十月

十七日(日) 関西学生能楽連盟秋季大会 於上田能楽堂

仕舞「嵐山」「班女」「羽衣」「松虫」「井筒」「籠太鼓」他

連吟二番。

十一月

六日(土) 七日(日) 六甲祭園遊会 焼鳥屋「狸々」開店

あいにくの雨だったが、皆なかなかの頑張りがようだった。

二十一日(日) 五十周年記念秋季発表会 於上田能楽堂

舞囃子「難波」(谷口)「芦刈」(藤井)「班女」(小山)

「敦盛」(松元)「熊野」(萩野)「天鼓」(浜田) 素謡九

番、仕舞二十五番、連吟二番。宇治先生、藤井、荒川、米花先

生、栗岡、西尾、杉本、堤、佐々木、戸次、木村富、志智、伏

見正、伏見和、黒川、東、福岡、反田、古沢、佐野、田中邦、

門之園、能勢、藤裏、小谷先輩が参加して下さいました。また懇親

会席上において、宇治先生の五十年に亘る御指導と御功勞に対

し、神戸大学長より感謝状が、風韻OB会より記念品が贈呈さ

れた。

十二月

十八日(土) 謡納会

その後クリスマスコンパ

宇治先生、荒川会長、並びに

諸先輩方には、多大なる御尽力

を賜わり誠に有難うございま

した。今後ともよろしく願

いたします。

Pub & Disco
NEW Jumbo pub



コンパ・パーティ
予約承ります。

☎332-0775

神戸市中央区
下山手通1丁目1-1
(東新ビル3F)

昭和五十七年十一月二十一日(日)十時三十分始

於 上田観正会能楽堂

五十周年記念秋季大会番組

鶴 亀 内藤 茂 山名 紳一

羽 衣 荒木 隆三 馬島 肇一

へ仕 舞へ

小 塩キリ 橘 高みゆき
春 栄 福代 恵子

富士太鼓 田岡 昌美
橘 高みゆき 福代 恵子

芦 刈キリ 山名 紳一
小 督 内藤 茂
蟬 丸道行 桑名 浩之
邯鄲 樂アト 松本 修治

へ連 吟へ

竹生 島 宇佐美 嘉人

へ舞 囃子へ

難 波谷 口敏文 山本 哲也 森田 澄子
芦 刈藤 井和之 片山 美保 野口 維夫
片山 美保 野口 維夫

清 経 桑名 浩之 武内 博教 木下 宏志

経 正 田岡 昌美

屋 島 武内 博教
葛 城キリ 荒木 隆三
猩 々 梅園 健治
融 井関 浩一

鶺鴒 梅戸 由香里 船寺 佳奈子

実 盛キリ 栗岡 治作

小山 徳子

福岡 真裕子
田中 邦子
玄象 東 裕子
佐野 邦子

籬 伏見 正章
松 風 反田 雅之
笠 之 段 戸次 威左武
枕 之 段 志智 敏一
女郎 花 伏見 和政

融 牧 二千雄 里井 三千雄

草子洗 小町 田岡 昌美
高 砂 梅戸 由香里
清 経キリ 船寺 佳奈子

藤戸 西尾 雄一 戸次 威左武

班 女 小山 徳子 山田 利子 野口 維夫
山田 美保 野口 維夫
敦 盛松 元 伊知郎 片山 美保 野口 維夫

田村 クセ
馬島 肇一
吉野 天人 宇佐美 嘉人
松 虫クセ 木下 宏志
菊慈 童 安原 正樹

熊 野 萩野 千夏 山田 利子 野口 維夫
天 鼓 浜田 伸子 片山 美保 野口 維夫

忠 度 野田 功
春日 龍神 池田 淳

千手 米花 稔 藤井 茂
荒川 祐吉

祝言 宇治 正夫

終了予定 十七時

主催 神戸大学風韻会
協賛 神戸大学風韻OB会

卒業生より

なまけ者の僕が四年間楽しみながらクラブを続けてこられたのも、クラブのみんなの支えがあったからなのです。本当にどうもありがとう。これから社会に出て多くの人とめぐり会っても、風韻会で出会ったみんなのことはいつまでも忘れないでしょう。

E 31 池田 淳

夢のように過ぎ去った四年間でした。長いと思っていた大学生生活がこれ程短いとは。お世話になった皆様どうもありがとうございました。夢から覚めた後も、クラブ活動を通して学んだことを大切にしたいと思えます。

E 31 井関 浩一

先輩に連れられて、こわこわ部室をのぞいた時のあの新鮮な気持ちになつかしいです。四年間いろいろお世話になりました。どうも有難う。

E 31 野田 功

卒業するからといって器用にピリオドをうつということが未だにできません。ひたすら謡と仕舞と風韻会に浸りきって過ごした四年間に、これ以上望むことはありませんが、時と共に後悔が押し寄せそうにも思えます。その時、私を支えてくれるのも、風韻会で学んだ何かではないか、そんな気がしています。

L 31 浜田 伸子

自分のやりたいことを思いっきりやった四年間。逆に言えば、気持ち次第でやりたいことができる学生時代だったと思います。青春に悔いなし。すばらしい四年間でした。お世話になった皆様に、厚くお礼申し上げます。

P 31 道本 浩子

卒業する日がこんなに早くやって来るなんて。自分があるクラブを巣立つなんて信じられない気持ちです。この四年間を楽しく過ごすことができたのも、風韻会を通してめぐり会えた人達のお蔭だと思っています。みなさんどうもアリガトウ。

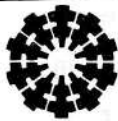
T 31 安原 正樹

古書買受・事務用品
(御報 参上)

小牧文具書店

神戸市東灘区御影本町2丁目15-25
電話 851-3286 阪神御影駅南東50m

登録 商標



御菓子司
常盤堂

神戸市東灘区御影中町
電話神戸(851) 4677番

決算報告書

自 昭和57年 1月 1日
至 昭和57年 12月 31日

収 入		支 出	
今期徴収部費	256,100	先生謝礼	174,000
大学援助金	50,000	50周年記念発表会	229,600
先輩寄付金	386,790	歓送謡会	144,000
風韻広告料	31,000	三大学発表会	31,000
発表会役料	320,000	三商大発表会	15,000
繰越金	260,976	学連役員料	21,000
		学連費	28,000
		風韻・名簿印刷費	233,000
		通信・交通費	144,890
		文具費	13,334
		雑支出	9,585
		来期繰越金	261,457
	<u>1,304,866</u>		<u>1,304,866</u>

1,304,866

1,304,866

伝 言 板

○昭和五十七年

五月 伏見和政氏(二十七回生) 御結婚!

東裕子さん(旧姓岡田・二十八回生)

御結婚!

多田羅明子さん(旧姓田中・二十六回

生) 御結婚!

○四年生進路決定!

池田 淳 香川県庁

井関浩一 愛媛県庁

野田 功 ロート製薬

安原正樹 タキロン株式会社

浜田伸子 大阪府教員

道本浩子 日本生命

新役員紹介

幹事長	J 33	木下 宏志
副幹事長	A 16	船寺佳奈子
渉内	P 33	桑名 浩之
渉外・文総	B 33	武内 博教
会計	B 33	梅戸由香里
学連役員	L 33	荒木 隆三
学連委員	B 34	梅園 健治

幹事長就任にあたって

J 33 木下 宏志

このたび幹事長を務めることになりました。いろいろな点で未熟なままの自分に、この大役が果せるかどうか とても不安でしたが、きつといい勉強になる、と自分を励まして引き上げることにしました。

神戸大学風韻会は、めでたく五十周年を迎えました。これは偉大なことだと思えます。この五十年の間に、一年一年、その時々先輩方は、熱心に運営にとりこんでこられたことでしょう。その重みを感じる時、しばしば圧倒されそうになります。しかし私たちは五十年という数字に圧倒されるのではなく、その間に残してください

った財産を精一杯利用して、自分たちなりに前進していけばよいのだ、と思えます。また、それが後に続く者のなすべきことだと思えます。その意味では、五十一年目に踏み出す私たちは、幸いに莫大な財産を残していただいています。それを十分に活用し、さらに新たな何かを残せるよう努力していきたいと思えます。

しかし、実際に運営していく内には様々な問題が生じてくるでしょう。二十数人の人が集まっているのだから、それは当然覚悟しておかねばなりません。問題が生じたとき、それがどんなものであっても、目をそらさず真剣に取り組んでいくことが大事だと思います。私には入部以来歩みを共にしてきたすばらしい仲間がいます。彼らがついてくれる限り、きつと乗り切っていけると信じています。

これまで私は随分周囲の人々に、そして自分に対しても甘えてきました。しかしこれからはそうもしてられない。むしろ一人一人のことを理解してあげなければならぬ立場になるんだ、と思うとき、最高に緊張します。私は、人のことを理解しようとする誠意をもって、一人一人に接していくよう努めたいと思います。と同時に常に全体をみつめ、和を大切にしていきたいと思えます。

この一年間は、大きな気持で、堂々と構えていたい。自分はこのクラブを引っばっていくんだ、という姿勢を忘れず、細心、かつ大胆に運営に取り組んでいきたい。そして自分の信念に従って、思うようにやっていこう、そう思っています。

本当にこれからが勉強の私ですので、よろしく御指導下さいませよう、お願い致します。

昭和五十八年度行事予定

3月2日～8日 春合宿
13日(日) 慰労ハイキング
19日(土) 歓送誼会
4月～5月 新入生勧誘月間
下旬 新入生歓迎ハイキング
5月上旬 旧三商大交歓発表会
中旬 ジュニア合宿
6月4日(土) 新入生歓迎コンパ
12日(日) 学連春季発表会
7月3日(日) 神戸三大学合同発表会
8月 夏合宿
11月20日(日) 自演会
中旬 学連秋季発表会
12月17日(土) クリスマスコンパ

喫茶と御食事

ニュー **浜**

神戸市東灘区御影本町4丁目8番17号
TEL 078(811)6944

写真撮影スタジオ

証明書写真
出張証明写真

サクライ写真館

阪神御影駅北100m TEL (078)851-2739

人の出逢いと心のふれあいを創る店

●サントリーアームズ
シーホーク

PUB SEA HAWK

●レストラン
キャプテンコック

CAPTAIN COOK

グループで楽しめる盛合せ料理
(ご宴会パーティー)

船の **スカイサントリー**

神戸三宮交通センタービル(9F) TEL 391-3705

居酒屋

ぜい六

学生さん歓迎

市バス六甲口南 TEL (851) 4787

O B 通信

○高岡幸彦氏（旧十四回生）

風韻会の五十周年を祝し、宇治先生の益々の御健勝を祈ります。

○諏訪秀行氏（新二回生）

五十周年とはすばらしいこと。小生は残念ながら謡曲とは随分永らく遠のき、さっぱりご無沙汰いたしております。

○児島新氏（新二十四回生）

これから雨の多い季節です。ナメクジの如く、床から足が浮かぬ様頑張ってください。

○戸田真弘氏（新二十八回生）

昨年は俺もやっと愛車を持つことができました。今、快調に走っています。

○嶋畑佳久氏（新二十九回生）

最近の仕事面では、本荷の貨物が東京に続々と入ってくるし、私生活では、ウインドサーフィンに行ったり宴会旅行に参加したりで多忙をきわめております。これから秋になると大きな行事があるでしょうが、みんなで一致団結して乗り切ってください。

この他にもたくさんのお便りを頂きありがとうございます。

編 集 後 記

「風韻」二十三号をお届けします。発行に際しまして、原稿をお寄せ下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

編集者の未熟と怠慢から、何やらまとまりのない記念号になってしまい、申し訳なく思っております。先輩の方々が、ひととき、風韻会を懐しまれるきっかけとなれば幸いです。

神戸大学風韻会は、五十年の歴史を背負い、今また新たな一歩を踏み出そうとしています。様々な問題を抱え、大きな転機であるとも言われます。或いは繰り返し波の一角にすぎないかもしれませんが、むやみに流されず、他人まかせにせず、確かり見すえてほしいと思います。私達がいつでも帰れるように、大切に育んでいって下さい。

編集委員

安原正樹
池田 淳
井関浩一
野田 功
浜田伸子
道本浩子

お 食 事 処
鉄 板 焼
おこのみ焼
定 食

ひ ろ

御影 大手筋
TEL 811-2844

パーティ、コンパニ
お祝い、お祝い
予約は
お電話!

3 **カンタベリー三番街**
〒251-0202 神戸市中央区三番街1-3-10
TEL 078-332-6235

フレイ・バフ
カンタベリーハウス
〒251-0202 神戸市中央区三番街1-3-10
TEL 078-332-6235